

中越地震災害調査結果のご報告

2004年10月23日の新潟県中越地震では、多くの技術者・研究者が被災地で調査を行いました。その結果は数多くの学術論文のほか、報道機関や地元講演会を通じて一般に公表されています。

私たち地質調査総合センター・防災科学技術研究所・新潟大学もまた、地震から1年半経過した春に、最も激しい被害を被った川口町で、地元の方向けに調査結果報告会(中越地震災害調査結果報告会～川口町の地盤と地震～)を開きました。この報告会は、調査者が「話すこと」よりも「対話を通じて、意見を聞くこと」「将来にわたって率直に意見交流ができる関係を作ること」を意図したものでした。そこで、私たちが話したこと、聞いたこと、感じたこと、を報告いたします。

発表者は固体地球科学の眼から自然災害を研究している者たちです。災害研究には、自然科学としての側面と同時に、それが社会に受け入れられて初めて意義をもつという、社会環境に左右される側面があります。言うまでもなく、災害受難の経験を持つ方々の意見は、これからの災害研究に欠くことのできない視点を与えてくれる貴重なものです。しかし、現実私たちが直接被災地の方々の意見や要望を聞く機会は多くありません。私たちだけではなく、自然災害の調査研究に携わる方の多くは、同様に感じてみえるのではないのでしょうか。災害軽減とその基礎研究のために何らかの参考になるのであれば、ここで私たちが経験したことを伝えることは無駄でないと思います。

なお、本報告会は被害要因の説明を主目的としており、地震のメカニズムや地震断層に関するものなど純理学的色彩の濃い研究については、ポスターと講演の導入部でごく簡単に概要を伝えるだけにとどめました。この特集でも、それらは割愛させていただきます。



写真1 復旧の進む川口町(2006年6月 小松原琢撮影)。

ます。発表内容の詳細は、p37の資料1をご覧ください。

中越地震の被災地は、外見上は順調に復旧しつつあります(写真1)。

それはもちろん喜ぶべきことですが、今もお様々な苦しみを抱えてみえる方が少なくないことも事実です。住宅の再建を待ちながら、原則的には2年間しか居住できない仮設住宅に今なお暮らす人が少なくありません。また、地すべりや天然ダムによる二次災害など、今もまだ人々を不安にさせる災害要素は残されています。報告会の場においても、こうした今なお続く、あるいは将来起こるかもしれない災害への対応について問われることがありました。

このような被災地の状況を推察しつつ、本特集を読んでいただけるなら幸いに存じます。多様な実態をもつ災害への洞察こそが、自らの被災経験を持たない(多くの)自然災害調査・研究者が、災害を総合的に捉え、被災者の立場に立った研究を推進する力となるものと信じています。(文責:小松原 琢)